

未来の位相としてのフィクション ヘンリー・ジェイムズの量子論的可能性

中村善雄

I 人文学研究と Quantum Humanities

近年の人文学で注目される動向のひとつに、量子力学の概念を批評の補助線として用いる Quantum Humanities がある。これは物理学の法則を文学作品へ直接あてはめる還元主義ではない。むしろ、観測者が対象から切り離せないこと、互いに排他的な複数の記述が同時に要求されること、観測以前には状態が確定しないこと、遠く離れた系が相関しあう非分離性といった量子的な知見を、解釈をめぐる従来の問いを組み替えるための視座として活用する試みである。テキストの意味が読者という観測者なしには成立せず、しかも矛盾する複数の解釈を同時に支えうるという批評的経験は、量子論にみる「観測」「相補性」「重ね合わせ」「もつれ」といった概念と豊かな類比をなす。本発表ではこうした概念を批評的アナロジーとして用い、ヘンリー・ジェイムズ作品に内在する不確定性や曖昧さを検討する。

II William James, Niels Bohr, Henry James——相補性をめぐる照応

これらの問題を考える上で、ウィリアム・ジェイムズは、ニールス・ボーアの「相補性」とヘンリー・ジェイムズの小説形式とを結びつける有効な補助線となる。相補性とは、光や電子が観測条件に応じて波としても粒子としても現れる事実を、互いに排他的でありながら全体の理解には双方が不可欠な二重の記述として捉える概念である。ここで興味深いのは、ボーアがウィリアム・ジェイムズを賞賛し、彼の『心理学原理』に影響を受けていたという点である(Whitworth 90)。ウィリアムにとって、意識とは明確な思考と曖昧な感覚・移行とが途切れなく流れゆくものであり、関心と注意に応じて特定の側面が選択的に前景化される経験であった。このような概念はヘンリーの文学とも深く通じている。ウィリアムが意識の選択的・関係的な性格を哲学として論じたとすれば、ヘンリーは同じ事態を視点や語りや焦点化という小説の形式のうちに実践したからである。彼は『ある婦人の肖像』の序文において「小説の家 (house of fiction)」の無数の窓という比喩を用いて、見る位置や媒介に応じて現実が異なる仕方では現れるとし(x-xi)、ボーアの観測条件にも比しうる認識論的構造を示している。

III 相補性の原理——「私生活」から『ねじの回転』へ

観測条件によって対象の様態が決定するという量子論的現象は、ジェイムズの短編「私生活」にみる奇妙な現象を説明する上で役立つ。著名な作家クレア・ヴォードレーは、社交の場では文学的名声に見合う深みを示さない一方、同じ時間に二階の私室で執筆するもう一人の姿として目撃される。量子論的アナロジーによって見えてくるのは、彼の「本当の姿」をどちらかに固定するのではなく、観測条件に応じて異なる存在様態が顕在化するという視点である。社交空間と私室は異なる観測装置として働き、相補的な姿を出現させるのである。

相補性は中編『ねじの回転』の解釈の構造を検討する上でも有益である。この作品の批評史は、従来、幽霊を実在とみなすか、それをガヴァネスの幻覚や抑圧された欲望の投影とみなすかという対立を中心に展開してきた。幽霊の実在を前提とする宗教的・道徳的読解と、それをガヴァネスの心理に還元する精神分析的読解は、いずれもテキスト上の根拠を備えながら互いに排他的であった。本発表では、この対立そのものを量子論的な不確定性や観測の問題と関連づけ、ガヴァネスの語りや、観測以前には一つの状態へ収束しない存在様態の比喩として読んだ。幽霊の出現はつねにガヴァネスの知覚を通して語られ、さらにダグラスの朗読という枠物語がその媒介をもう一段重ねている。こうした重層的な構造ゆえに、作品は幽霊譚と心理小説という二つの可能性を同時に保持し、一方を選んででも他方が読解を内側から揺るがし続ける。『ねじの回転』の核心には排他的な二つの読解が互いを補い合うことではじめて作品の意味が成立する、いわば「相補性の美学」が宿っているのである。

IV 量子もつれの諸相——「友達の友達」から『過去感覚』へ

相補性が一つの事象をめぐる二重説明を許容するならば、量子もつれの比喩は、二者間の不思議な関係を読み解く一助となる。量子もつれとは、複数の粒子がそれぞれ独立したものとしてではなく、一つの相関した状態として記述される現象である。一方の粒子を測定すると、遠く離れた他方についても対応する性質が相関的に定まり、両者は非分離的な関係にある。ジェイムズの短編「友達の友達」では、語り手の婚約者と女友達がい知る前からそれぞれが母の死と父の死を遠隔地で察知するという類似した経験を共有し、両者が会おうとするたびに「井戸のバケツ」や「シーソー」(332)の両端のようにすれ違う。一方の現前が他方の不在を条件づける二人の反相関的な関係は、アインシュタインが「不気味な遠隔作用」と呼んだ量子もつれの様態と共振する「奇妙な法則」(332)として描かれる。終盤、婚約者が女友達と初めて出会ったとされる場面でも、それが彼女の死の直前の訪問なのか、死後に幽霊として顕現したのか明らかにされず、読者はその出来事をいずれか一方へ完全に収束させることはできない。この作品は科学がまだ合理的説明を与えていない出来事を扱っているとニック・フリーマ

ンが指摘していることを踏まえれば(135)、量子論的比喻は遠隔的な二者の相関関係や生と死の二重性といった奇妙な現象を理解するための有効な批評的枠組みを提供しうる。

一方、未完の長編『過去感覚』は、この非分離性を時間的な関係へと移し替えた作品と言える。歴史家ラルフ・ペンドレルは肖像画を契機に過去の同名の男と入れ替わるが、両者は各々の差異を保ったまま相関しており、ラルフが過去へ向かう機会を得ることで過去の男は未来へ向かう機会を得るという、反転的な交換の構造を成している。『過去感覚』の後に続く「構想ノート」においても、過去の男はラルフの逸脱を、通常の因果では説明しにくい「計り知れない直観」(313)によって遠隔的に感知する存在として描かれており、両者の関係は単なる入れ替わりではなく、時間を横断して非分離的に結びつく「時間的もつれ」として理解できる。

V 「懐かしの街角」の多世界的解釈

非分離性が人物や時間の相関を示すならば、短編「懐かしの街角」は、選択の分岐が生み出す別様の因果を前景化する。この作品が問うのは、選ばれなかった人生の可能性である。33年ぶりに帰国したスペンサー・ブライドンは、空き家である生家で「もしアメリカに留まっていたら自分は何者になっていたか」という問いに取り憑かれ、夜ごと家に分け入って別様の自己を探索する。この主題を照らし出すのが、ヒュー・エヴェレット以後の多世界解釈である。その解釈では、観測によって一つの結果だけが残るのではなく、複数の可能性がそれぞれ別の履歴として存続すると考えられる。奇しくもデウィットらが編んだ『量子力学の多世界解釈』にて、ウィリアム・ジェイムズの「可能性の海」の一節がエピグラフに掲げられていることは、多世界解釈の言説とウィリアムの思想との共鳴を示唆している。ゆえにボーアの相補性と同様に、ウィリアムを補助線とすることで、多世界解釈とヘンリー・ジェイムズの小説テーマの共振性が強調され得る。シャリン・クラゲットも「物語の中に何人の『ブライドン』が存在しようとも、批評は彼らを無数に増殖させてきた」(199)と述べ、ブライドンの同一性が一つに収束せず、物語内でも批評史においても複数化されてきたことを指摘している。その意味で、クラゲットの議論は、ブライドンを同一の主体から分岐した複数の履歴の持続として捉える可能性と共振している。

VI まとめ

本発表が示そうとしたのは、ジェイムズ作品に内在する奇妙な現象や曖昧さを、認識の条件そのものを問う形式として読み直す可能性である。ここで用いた量子論的な概念は、作品内の出来事を物理学的に説明するためのものではない。それは、観測条件によって現象の現れ方が変わること、複数の可能性が排他的でありながら同時に保持されること、主体が他者や別の自己から完全には切り離されないことを記述するための、批評的なアナロジーである。この観点に立てば、ジェイムズ文学の不確定性は、複数の説明が競合しながらもいずれも作品の成立に不可欠であり続けるよう構成された、精密な形式的戦略として立ち現れる。そしてこの議論は、ゴシック的な不気味さを観測条件の問題として捉え直す Quantum Gothic の系譜へと接続できるだろう。この流れにおいてヘンリー・ジェイムズは、視点や語りといった小説技法を駆使して、現実が確定的には与えられない状況を文学の言葉でつくり出した作家として位置づけられる。その重要性は量子論を予見した点にあるのではなく、後世の量子論的読解をも可能にするほど精密に、認識の不確定性を文学的形式へと結晶させた点にこそある。

引用文献

- Claggett, Shalyn. "Narcissism and the Conditions of Self-Knowledge in James's 'The Jolly Corner.'" *The Henry James Review*, vol. 26, no. 2, 2005, pp. 189-200.
- DeWitt, Bryce S., and Neill Graham, editors. *The Many-Worlds Interpretation of Quantum Mechanics: A Fundamental Exposition by Hugh Everett, III, with Papers by J. A. Wheeler, B. S. DeWitt, L. N. Cooper and D. Van Vechten, and N. Graham*. Princeton UP, 1973.
- Freeman, Nick. "Realism and the Supernatural in Ghost Stories of the Fin de Siècle." *English Literature*, vol. 7, 2020, pp. 133-50.
- James, Henry. "The Friends of the Friends." *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 17, Charles Scribner's Sons, 1909, pp. 323-64.
- . "The Jolly Corner." *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 17, Charles Scribner's Sons, 1909, pp. 433-85.
- . "Preface." *The Portrait of a Lady. The Novels and Tales of Henry James*, vol. 3, Augustus M. Kelley, 1976, pp. v-xxi.
- . "The Private Life." *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 17, Charles Scribner's Sons, 1909, pp. 215-66.
- . *The Sense of the Past. The Novels and Tales of Henry James*, vol. 26, Augustus M. Kelley, 1976.
- . "The Turn of the Screw." *The Novels and Tales of Henry James*, vol. 12, Augustus M. Kelley, 1971, pp. 145-309.
- Whitworth, Michael H. "Quantum Theories and Modernism: Complementarity in Virginia Woolf, William James, Henri Bergson, and Niels Bohr." *Journal of Literature and Science*, vol. 16, no. 2, 2023, pp. 84-99.